

2013年 第61代 理事長 増田 大典

その未来は今 ～ 信頼する仲間と 共に前へ進もう ～



### 主な事業

社団法人松山青年会議所法人格移行  
松山春まつりお城まつり  
愛媛マラソン支援事業  
わんぱく相撲(まつやま場所・全国大会) 事業  
わかつばきファンド管理・運用事業  
道後温泉一番走り～湯上り頂上決戦～事業  
まつやま市民シンポジウム事業  
まつやま「キズナ」プロジェクト事業  
松山の誇るべき たからについて考える事業



## 社団法人松山青年会議所 2013年度理事長所信

社団法人松山青年会議所

増田 大典

### 【はじめに】

私は第2次ベビーブームの真っ只中にこの松山で生まれました。特に生まれ故郷に対する愛着心や郷土愛というものを感じたり、意識することもなくこのまちで暮らしていましたが、学生時代には自らの意思で松山を離れ、県外の都市圏で生活することを選択しました。長年暮らした生まれ故郷を離れることによって初めて気付いたのは、穏やかな気候や美しい瀬戸内海と山に囲まれた豊かな自然環境、それでいて身近でコンパクトな範囲に必要なインフラや物資が揃っている社会的、経済的環境、そして何よりもこのまちに住み暮らす人の温厚な人柄など、自分が生まれ育ったこのまちの素晴らしさでした。そして2005年、私は松山青年会議所に入会しました。これまで真剣に考えたことのなかった「まちづくり」や「ひとづくり」に関わっていくことによって初めて生まれたのは、私がこのまちで生活し、企業人として経済活動を行うことができるのは、このまちに住み暮らす全ての人のおかげであるという感謝の念と、JC活動を通じてこのまちの「明るい豊かな社会」を実現することで、その恩返しをしなくてはならないという想いでした。

2011年、松山市を訪れた観光客数は前年比で3年ぶりに減少しました。また、このまちのたからである道後温泉本館と椿の湯の年間入浴客数も平成以降で最低の数字を記録しました。この主な原因としては、東日本大震災による旅行需要の低迷が考えられますが、ここ数年の観光客数増加の要因であったNHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』の放送終了、加えて高速道路の休日上限千円や無料化実験の終了なども影響したことは想像に難くありません。都市型産業として大きな地位を占め、松山市の就業構造の中でも7割を超えている第三次産業であるサービス業や小売業は、この苦境にあえいでいます。それに加え、この年には四国最大の人口を擁する松山市の人口増減も減少に転じており、第一次、第二次産業も明るい展望が開けていません。まさに今、このまちは分岐点に来ているのです。

このまま私たちの愛する郷土松山の活力が失われていくことに無頓着でいいのでしょうか。この速い時代の流れに置き去りにされていくのを傍観していいのでしょうか。このまちの将来を担う私たち青年こそ、この状況を打破すべく、率先して行動しなければなりません。

### 【公益社団法人として】

2013年度中、社団法人松山青年会議所は公益社団法人松山青年会議所として生まれ変わります。法的な解釈をすれば公益目的事業、つまり「不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するもの」に積極的に取り組まなければなりません。そのためには、私たちの行う事業や運動を企画、立案段階から決算、報告までしっかりと構築することが不可欠です。

また、これを機会に松山JCの活動内容を一つひとつ見直すことも必要だと考えます。特に継続事業については、変えるべきことは変えなくてはなりませんし、これからも継続すべきものなのかどうかを含め、今後の方向性を改めて検討すべきではないでしょうか。

このことは、これまでの惰性を断ち切り、新しいことに挑戦するチャンスでもあります。JC活動や事業への取り組みに対して最も必要なことは、がむしゃらに、一生懸命にがんばることだと私は考えます。しばしばJC活動における事業は「プロセスや経緯が大事であって、もし結果的に失敗してもかまわない」などと言われます。しかし、結果を出そうとするプロセスの中で、力の限り取り組むからこそ意味があるのであって、自分にできることだけを無難に、安全にこなすだけでは何も生まれないし、成長はありません。新たな何かに取り組もうとするとき、自分には経験がない、時間がない、能力がないなど、できない理由を挙げると果てしなく出てきます。だから、やらない、行動しないことを選択しがちになってしまいます。しかし、できないことにチャレンジすることによって、初めて人の成長があるはずです。今、行動すること、できなくても、できないなりにやってみることは必ず未来に繋がります。今を悔いのないように行動していれば、未来も間違いなく悔いのないものになるはずです。今は過去の結果であり、未来は今の結果なのです。

## 【「社会」人として】

私たちは、一般社団法人ではなく公益社団法人を選択するのですから、これまで以上に 市民から「必要とされる団体」、「信頼される団体」として活動していかなければなりません。そのためには、まず私たち一人ひとりが「必要とされる人」、「信頼される人」になることが不可欠であると考えます。

私自身、青年会議所に入会以来、JC活動を通じて松山JCメンバーのみならず、他LOMのメンバーや様々な企業、団体の方々など多くの人と接してきた中で、私にとって「信頼する人」、「必要とする人」、「必要とする人」とめぐり合ってきました。その人と向き合い、顔を合わせてやり取りをする中での行動や垣間見える言動に、良識ある社会人としての説得力があるかどうか、私の「信頼する人」、「必要とする人」であるかを判断するファクターです。私たちはJCメンバーである前に、一社会人であることを忘れてはなりません。私たちはJC活動のみならず、企業人としての活動、あるいは何気ない日常生活において、不特定多数の人と接し、自分の意志や感情を伝えています。それらの場面での私たち一人ひとりの立ち振る舞いによって、私たちがどのような団体であるかを判断されるのです。私たちが社会から「信頼できない」、「必要ない」人や団体であっては、「市民意識の変革」という目標は達成できません。まずは私たちの誰もが社会の一員であることを自覚しましょう。

### 【会員拡大について】

「数の論理」は現代社会においては否定し難く、「数は力」であります。松山青年会議所の会員数はここ数年減少傾向が続いており、近い将来において会員数が100名を切る可能性が現実味を帯びてきました。このままでは、松山JCの「力」が減衰した状態で、これから想定される数々の難題に取り組んでいかなければなりません。会員数の減少は全国どのLOMも抱える問題であり、昨今の国内、そして松山における経済状況や人口統計などを考慮すると、避けられないことなのかもしれません。しかし、全世界においてJC活動の目的や意義は、設立当初から不変であり、全国には会員数を増やしているLOMも数多く存在します。この松山のどこかに私たちと志を同じくする人がきっといるはずですが、ただ、各メンバー一人ひとりの「個」の力には限界があります。私たち松山JCメンバー全員が「オール・メンバー」で継続的に会員拡大に取り組まなければなりません。

そして、私たちの活動内容やその魅力をできるだけ多くの人に伝え、知っていただく必要があります。特に2014年に控えた全国大会は、私たちがこれまでに取り組んできた「まちづくり」や「ひとづくり」を一気に推し進める絶好の機会であり、松山における経済状況、また企業活動にも大きな影響を与えることができるはずです。私たちの活動を通じて、多くの市民を魅了することができれば、私たちの運動への賛同者も必ず生まれます。これをチャンスと捉え、青年会議所の魅力を積極的に発信していかなければなりません。

### 【全国大会について】

2011年、松山青年会議所が2014年度第63回全国大会を主管することが決定しました。開催前年度にあたる2013年度は、いよいよ大会の実質的な準備段階に入ります。つまり、これまで策定してきたものを現実に合わせて精査し、何を行うべきか、何をあきらめるのかを決定し、いつでも開催できる準備をする年になります。

そのためにはまず、各種団体や公共機関などと連携を密にし、確固たる協力体制を築いていく必要があります。特に副主管予定LOMに対しては、最大限の情報発信を行っていくことで、意識を共有していくことが大切です。副主管の存在なくしては、大会開催はままたりません。つまり、愛媛ブロック協議会内、四国地区協議会内のLOMとの繋がりをこれまで以上に強固なものにしなければならないのです。また、日本青年会議所が主催する全国大会を松山青年会議所が主管するのですから、私たちは最新の日本青年会議所の運動の方向性をリアルタイムで知っておくことも必要となってきます。

それには、積極的に出向することが肝要だと考えます。出向することによって得られる知識や情報は貴重なものです。しかしそれ以上に、自分を変えてくれる環境に身を置き、馴染みのないまちで、お互いに面識のない多くのメンバーと出会い、交流を持つという機会や経験は、日常の企業活動では味わえない、出向における醍醐味です。自分にとって未知なものとの出会いや新しい発見は、必ず自己変革をもたらし、自分の成長に繋がるはずです。ただ、出向するには時間的、金銭的な投資が必要になるという一面も現実にあります。しかし、だ

からと言って出向することに対して身構えたり、後ずさりして欲しくないのです。出向する機会はメンバー全員、平等にあります。少しだけ背伸びをして、それぞれの可能なペースで参画していただきたいと思います。

また、行政や各種団体との連携についても強固なものにしていかなければなりません。特に私たちと共にこのまちのために汗を流そうと考える市民や団体と積極的に連帯していくことによって、私たちのビジョンや想いを共有していくことができます。それが広い意味でこのまちの活性化や市民意識の変革に繋がっていくのです。

思い返すと、私が2005年に入会して間もない頃、初めて全国大会についての議論が始まりましたから、提案当初から大会開催までに約8年が経過することになります。この8年という長い歳月の間に、私たちは多くの人々の「想い」を託されていることを決して忘れてはいけません。

#### 【私たちのまちの未来を切り拓く】

2009年、日本では歴史的な政権交代が実現しました。これによって、多くの国民はこの国の長年に亘る停滞状態が打開されることを期待しました。しかしながら、決められない政治が継続され、特に東日本大震災以降は、どこか私たちから遠い場所で物事が進んでいるような気がするのには私だけではないはずです。この現状に多くの国民が失望し、落胆していますが、私たちが選挙において「投票」という意思表示によって形成された結果が今の国政を司っているのです。「その国のレベルは、国民のレベルで決まる」とよく言われますが、この現状を生み出したのは、本を正すと私たち国民の一人ひとりであるということを今一度考えなければなりません。

そのためには、まず自分たちのまちは自分たちでつくるという意識の醸成が必要です。特定の政党や政治団体に加担しないで、公正中立な立場にあり、これからの松山を担う私たちだからこそ、市民に対して自分たちのまちの未来を真剣に考える機会を設けることによって、このまちを変えるという意識を醸成していくことができるのではないかと考えます。

#### 【結びに】

1952年、松山青年会議所は戦後の混乱期の最中に生まれました。以来、時代や社会状況がどんなに大きく変わっても、「明るい豊かな社会」の実現を目指し、地域に根差した活動を続けてきました。創立60周年を迎えた昨年、松山青年会議所のそれまでの歴史を振り返る度、私たちが現在、このまちで青年会議所活動ができるのも、先輩が連綿と積み上げてきた歴史があればこそだと実感しました。私たちはその歴史に感謝し、これから「常に進んでやまざる青年」として行動しなければなりません。松山の未来は、あらゆる価値の根源である私たち青年がつくるのです。